

原作…エドモンド・ロスタン

「シラノ・ド・ベルジュラック」

訳…楠山正雄

翻訳・脚色…額田六福

上演台本…永妻晃

白野、暖簾のれんを開けて入って来る。

白野 よう、おやよう。(辺りを見渡し) ……。

何だ、客は誰もおらんのか…流行はやらぬ店じゃ。おやじ、何か美味しい物を食わせる……と、言っても美味しい物を食わせぬ店だが、怒るな怒るな。しかし、黒船くわいせんの来航らいこうで世は幕末、我ら会津藩しゆごしやくも守護職しゆごしやくを命ぜられこうして京の都に馳はせ参まじたが…。時におやじ今何時だ？ 『八時か』 ……九時まではまだ間あるな、ああ？ 『九時まではまだ間あるな』と言ったのだ。何、俺が嬉しそうな顔をしていゝる？ 嬉しいどころか、俺は狂いそうだ、滅茶苦茶めいちゃくちやに狂いそうだ。ところでおやじ、何だその目は、俺を見る目がいつもと違うぞ！ 『なに偉い！ 天下一偉い！』、俺が？ 何が偉い？ いったい俺が何をしたというのだ、何を？ なんだあれかい、昨夜ゆうべの南座みなみざの一件か。俺が人気役者の紋十郎もんじゅうろうをとつちめて、芝居しばをぶちこわしたあれかい。

ブン、ちよいとした見世物みよものだったらしいな、ざっとこんな具合だ。

『やい、紋十郎、誰が出ると言った、すぐに舞台から引っ込め！』俺は怒鳴りながら花道を突っ走り、舞台のど真ん中に仁王立におうたちになった。つた。

『やい、へぼ役者め、もう我慢ならんぞ。引っ込め、引っ込め！ さ、

三度手を鳴らすからな満月野郎、三度目には月蝕げつしやくになって消え失

せろ！ そら一つー、二つー、三つだッ!!』

はっはっ、紋十郎の奴、命からがら楽屋に逃げ込みやアがった。客席は蜂の巣を引っかき廻したような大騒ぎ、

『こうなったら平土間ひらじま残らず俺が相手だ。文句のある奴は出て来い!! おっ、出て来たな。鍾馗しゅうわさまによく似た髭ひげつ面の浪人殿か…

…(一步ひりぞき) おっとどっこい。名乗りも上げずにいきなり刀を抜いたな！ では、お相手申そうかな。ところでこのわしの名は白野……白野は歌よみにでござる。その証拠には、刀を交えながら即席に長唄でも作ってお見せもうそうかな……と、言ったところで、その面では猫に小判、七面倒くさいことは抜きにして、近頃流行る戯ざれ唄でやっつけてこませう……むー(考えて) 出来たぞ、さあ来い!』

刀を抜く。

『♪よせば良いのに何ともお主は一途いちず♪

待て、貴さま何だって先刻からジロジロと俺の鼻を見るんだ？ こ2

の鼻が象のようにブヨブヨブランブラしてるとでも言うのかい、それともこの鼻の上に蠅が花見でもしているとしても言うのかい？ じゃ何だってそんな不景気な面をするんだ。貴さま俺の鼻が人並よりちよとばかりデカ過ぎるとでも思っているのかい！ なに、

「いかにも貴公の鼻は中々でつかい……」

この、ナマクラ小僧、貴様のせりふはそれだけか？

では、平土間、さしき棧敷の御見物衆もどうぞお聞き下され、東西東西！ さて、どなたもご存知のこのでつかえ鼻は、優しくって親切で礼義を弁わえ、寛大な上に勇氣ある、御本尊様だ。

やい！ かりにも俺のこの顔の真ん中の飾りについてとやかくぬかす奴があつたら、どいつこいつの容赦はせんぞ……。

ところで拙者は会津半朱雀隊士白野弁十郎と申す者でござる。(礼

・朱雀隊は、会津戦争に際して会津藩が組織した、18歳から35歳までの武家の男性によって構成された実戦部隊である。

野戦を想定した従来の長沼流兵学からフランス軍制への改革により作られ、主力部隊であった。総督は黒河内式部で、隊員は約1200名。他に白虎隊、玄武隊、青龍隊、幼少隊などがある。

——浪人が斬つて来るのを受け止める——

『おつと見事にお主の刀を受け止め申した。では仕舞の一句もまとめばつさりゆくぞよ。エヘン、♪よせば良いのに何とも一途いちず、いまは

仏に念仏を唱え、地獄極楽そら目の前だ♪！ バッサーツ！』

——斬り倒す——

『おい、こら起きろ、こら安心しろ、峰打ちだ。三十六計逃げるが勝ち、逃げるや逃げるや。』

あいつめ見得みえも切らずに花道を引つ込んでゆくわい、出来損ないの大根役者め！ はっはっ、先ずは今晚はこれまで』

おやじ、ざっとこんな具合だった。おかげで、木戸銭の払い戻しで今年中の手当てがみんなファイだ、あ、はっはっはっ。

ところでもう何時だい？ いや実はナ、俺は或る大事なひとと今朝この店で落ち合う約束をしたんだ。だからその人が来たら他の客は皆断つてくれ、いいか。

なに、『みなませ仰せられるな、万事承知ばんじしょうちのすけ之助』

うれしいぞおやじ、ならばついでに、硯すずりと巻紙、筆を貸してくれ。

おやじから、硯すずりと巻紙、筆を受け取り。

さて、俺はこれを書いて渡しておいて逃げるか……臆病者め！

だが俺はあの人に物を言うことが出来たら殺されてもいい、——おい、おやし、何ぞきだいっ！ いやはや口ではとても駄目だ。だが書く方なら訳はないぞっ。さあ書くぞ恋の手紙を（書く）うむ、これでよし。

なんだおやし、『なぜ俺が人気役者の紋十郎を苛めたのか、その訳をしろたいだど？』、なら答えは簡単さ、俺はもうどうにも我慢ならなかったんだ。あの下司役者め、天下の二枚目を気どりやがって、芝居を演じるひまに、目を細めて棧敷に色目を使いやがるんだ、あいつめ、人もあろうに俺の命よりも大事なあのひとに……。

はっとして口を押さえるが、

俺に『そんな女がいるのかというのかい？』、そりゃ俺だって恋いぐらいするさ、その『相手か？』……夢にも思わぬ美しさだ。言い古した言葉だが、衣通姫でも照手の姫でも……、

・衣通姫は、記紀にて伝承される女性。衣通郎姫・衣通郎女・衣通王とも。大変に美しい女性であり、その美しさが衣を通して輝くことからこの名の由来となっている。本朝三美人の一人とも称される。和歌に優れていたとされ、和歌三神の一柱としても数えられる。記紀の間で衣通姫の設定が異なる。

・照手の姫は……長い話なのでインターネットでよろしく。

そこまで言えば判るだろう、俺の従妹の甘露寺家の千種だ。